

みんなで生きるために

マヤとネパールに寄せるある医師の人間愛

岩村 昇著

みんなで生きるために

〈 ¥ 250 〉

昭和40年 5 月 25 日 第 1 刷発行

著 者 岩 村 昇
© Noboru Iwamura 1965

発 行 者 野 間 省 一
東京都文京区音羽町 3 の 19

印 刷 者 北 島 織 衛
東京都新宿区市谷加賀町1の12

印 刷 所 大日本印刷株式会社

発 行 所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽町 3 の 19
振 替 東 京 3 9 3 0
電話 東京(942)1111(大代表)

(落丁・乱丁本はおとりかえいたします。) <製本 中沢製本>

みんなで生きるために

マヤとネパールに寄せるある医師の人間愛

岩 村 昇 著

まえがき

私は、一九六二年一月から一九六三年十二月にかけて、ネパールのタンセン市を中心に結核の診療活動に従事した。この本は、そのときの生活の記録である。

ネパールでの二年間はあまりにも短かった。ことばにも、食事にもやっと馴れて、これからぼつぼつというときに、三年のつもりでもってきた予算が底をつき、多数の結核患者を残したままネパールの山を去らねばならなくなった私の胸中はやるせなかった。別れの日、ひとりの患者さんが、

「ドクター・ジーワン・コ・ヤットラ・マ（どうかいのちをたいせつにしてくれ）。日本には道路の上を、殺人機械が走っているそうだから。」

と、旅の安全を祈ってくれた。その旅は、ジーワン・コ・ヤットラ（いのちの旅路）であり、目的地に達するまでの断片的な旅行ではなく、自分が生きる目的に近づく長い人生の旅路であった。

私の見たネパール。それはすべてが驚異であった。世界の屋根ヒマラヤのふところにいだかれたネパールの自然、そこに展開される人間の世界、そこに住む人たちの風俗・習慣・思想の特殊性、それらは、私たち日本人的な感覚では予測を越えるものばかりであった。

ネパールの自然と社会、そこには、古代と現代が共存し、人間と鳥や獣がなかよく共同の生活をおくることのできる世界であった。

そういふなかで、日本人の医師である私が、ネパールで教えられたいちばんたいせつなことは、ジーワン（いのち）の尊さであり、それを守り合っているサンガイ・ジウネ（みんなで生きる）人間関係の美しさであった。ネパールでは、現在、いのちを守るためにたたかう相手は、自然の脅威であり、伝染病の侵襲なのである。

ネパールでのこのたたかいの主役は、あくまで、ネパールの人たちである。医師である私たちもネパールにはいれば脇役であり、ヘルパー（助手）にしかすぎない。なぜなれば、何処にあつてももつとも高くあるべきは、そこで生きている人間自身なのだから――。

私たちが、日本に帰ってまもなく、期せずして善意の人々から「ネパールへBCGを」のキャンペーンが起こり、大きな運動に広がっていった。この運動を盛り上げたのは、日本の多く

の人々のいのちをいとおしむ心であり、この十月、善意の結晶をたずさえて、再びネパールへ帰ろうとしている私たちは、日本とネパールを結ぶメッセンジャーにしかすぎない。

先に、ネパールからの帰路をジーワン・コ・ヤットラ（いのちの旅路）といったのは、このネパールのサンガイ・ジウネ（みんなで生きる）と、日本のいのちをいとおしむBCG基金運動に共通なヒューマニズムを見いだし、自らの生きる姿勢を正されるような衝撃を感じたからである。

私の体験をとおして紹介されるネパールは、国じゅう、病気だらけのような印象になりかねない。何しろ、たった二年の、しかも西部ネパール、パルパ州という限られた地域の生活であつた。それに、公衆衛生医である私は、特に結核という社会病を追いかけていく以上、どうしてもネパールの底辺に眼を注ぐことになった。私は、そこで生きている誠実で勤勉な、たくましく美しい人間の姿を見、聞き、感じとったままをみなさんにお伝えすることにした。古代と現代の共存するネパールの姿を社会科学的に分析することは、とうてい私の力の及ぶところではないからである。

この貧しい書が、ネパールの真の姿の理解の一助になれば、私の喜び、これに過ぎるものは

ない。

終わりに、私たちのネパールでの二年間の生活を支えてくださり、これからネパールに送り出してくださる日本キリスト教海外医療協力会のみなさん、現地で不馴れな私たちを助けてくださった欧米各国の医師・看護婦さんたち、私たちとネパール行きをともにされた上田・川島両看護婦さん。そしてネパールの友人、ネパールへBCGをお寄せくださっている日本各地のみなさんに、あらためてところからお礼申し上げる次第である。

また、この本のために最初からお力を貸してくださった編集部の町田さんはじめ、講談社のみなさん、ところよく写真を提供してくださった日本テレビの池松さんに感謝の意を表したい。

一九六五年五月七日

ベトナムの戦火が一日も早く消えんことを祈りつつ

目次

まえがき……………三

1 私はヒマラヤに憧れた……………二

(1) マヤは話す、笑う、怒る……………三

(2) よきサマリア人の記憶……………三

(3) これがネパールだ……………三

(4) 歴史のしみこむ町……………三

2 私はタンセンの町へやって来た……………七

(1) 別れの甘い花の香り……………四

(2)	あれがタンセンの灯だ……………	五
(3)	私は、この手で赤い泥をとねた……………	三
(4)	癩患者の魂の灯……………	七
(5)	雨期、私達は陸の孤島にいる……………	九
(6)	差別は生きている……………	八

3 私には患者とともに山を歩いた…………… 五

(1)	なんじ幼子のごとく……………	六
(2)	生まれて、そして死んでいく……………	一〇三
(3)	みんなで、生きるために……………	一一
(4)	その一滴に、一つの命が……………	一八

4 私はマヤを愛した…………… 一七

(1)	マヤとその兄、その父母……………	一六
-----	------------------	----

(2)	あるネパール教師の失踪……………	一四〇
(3)	さようなら弟よ、さようならおねえさん……………	一四九
(4)	その小さな手に銀貨を握らせて……………	一六〇
(5)	善意の波紋……………	一六六

岩村先生ご夫妻をネパールに送る……………	日野原重明二八〇
----------------------	----------

デザイン	藤枝陸郎
写真	池松俊雄
	畔田藤治
イラスト	宮永岳彦

本書の印税は、すべてネパールの子どもたちのBCGの費用として、日本キリスト教海外医療協力会に献金される。

1 私はヒマラヤに 憧れた



Y. Nishigaki

(1) マヤは話す、笑う、怒る

一九六三年十二月二十七日の真夜中、東京の羽田空港に到着し、二年ぶりで故国の地上に降り立った私たちを、山陰の米子市から迎えに出てくれた母は、いきなり、

「昇」

といって迎え、人目も構わずとび出してきた。それから、史子ふみこの手に抱かれたマヤに笑顔を向けた。

「マヤちゃん、おばあちゃんよ。」

母は、この色の黒いマヤを抱き取り頬ずりをして、おばあちゃんよ、おばあちゃんよとなん回も繰り返して教え込もうとするのだった。

しかし、母の口からついて出る日本語がさっぱりわからないマヤは、大きな目を見張ってしきりと、おかあちゃんの史子の存在を確かめながら、私たちの会話に耳をそば立てていた。

そして会話の中に、「マヤ」という名が出てくるたびに、なんとかしてその会話を理解しよ

うと努力しているようだった。それでもどうしてもわからないと知ると、おかあちゃんの頬をたたいて怒るのである。

「マヤ・ライ・バタイデウ。」

『マヤにも話してちょうだい』

そのネパール語を史子が通訳する。

「マヤにも話してちょうだい。」

「おお、そうかい、ごめんよマヤちゃん。」

母はマヤをあやししながら、出迎えの人々の間をぬって歩き回る。

やがて空港のざわめきも静まると、マヤは無心に母の手の中で眠ってしまったのであった。

あの世界の屋根ヒマラヤのふもとタンセンの町から、この見知らぬ日本の国にやってきたマヤは、今、いったいどんな夢を見ているのであろうか。ビルの林立する大都会の夜を車で走りながら、マヤはあの故国ネパールのカリガンダキ河の激流の音を聞いているのだろうか――

ともあれ、この夜からマヤの日本での生活が始まっていたのである。

米子へ帰ってから三カ月、マヤはどこへ行くにもおかあちゃんの通訳づきでなければならなかった。

しかし、いつまでもこのままではいけないと思った私たちは、四月になると思い切って幼稚園へ入れていただくことに決心した。生活環境が変わった上に、日本語の不自由なマヤを、いきなり日本の子供たちの中へ入れることは、大変な冒険ではあった。しかし米子市良善幼稚園の先生方は、このネパールのマヤをあたたく迎え入れて、手まね、身ぶりでマヤとのつき合いを始めてくださったのである。

それから一カ月、二カ月经つうちに、マヤは一日に平均五つ六つもの日本語を覚えてきて、得意げにしゃべってきかすようになった。

「いってまいります、かあちゃん」

「おかえりなさい、とうちゃん。」

そして、一年経った昭和四十年の春、マヤは幼稚園の学芸会に「三匹の小ブタ」の劇に出演するほどになった。その日、私たちは、期待と不安とに胸をときめかせながら、客席でマヤの出てくるのを待っていた。と、舞台のそでから、エプロンをかけ、買い物かごをひきずるようになげ、マヤの黒い顔があらわれた。

「あたし、小ブタちゃんのアマです。あ、ちがった、小ブタちゃんのママです。」

あがって、おもわずネパール語が出てしまったのだろう。



幼稚園で遊技に興ずるマヤ

P T Aのおとうさん、おかあさんたちは、そのマヤの可愛い姿に、どっと湧いた。笑い声がしばらくやまなかった。

すると、マヤは舞台の上から叫んだのだ。

「笑っちゃ、いやよ。」

史子のマヤを見つめる目に涙が光っていた。

ネパールの、マヤの本当の母親に一日この姿を見せてやりたい！

マヤはどんなに日本になじんでも、決してネパールを、父母兄弟を忘れようとはしなかった。

「マヤちゃんのお家はどこ？」と聞かれれば事実、今でも「ここ」と答えるが、